

## — 特集 —

## 東西学術研究所シンポジウム：

## 『近代との出会い—風景からのアプローチ—』

## はじめに

東西学術研究所長 橋本 征治

本特集は、関西大学東西学術研究所が平成20年1月24日に開催したシンポジウム：『近代との出会い—風景からのアプローチ—』において発表された報告を基に編まれた論文集である。

さて、一口に「近代との出会い」といっても、そこにはさまざまな近代があり、多様な出会いがある。例えば、近代を切り拓いたヨーロッパにとっての近代と、ヨーロッパ近代に翻弄された植民地にとっての近代との間には大きな差違と落差があり、また「近代との出会い」にもさまざまなかたちや状況がある。そして、そこに生起し立ち顕れる事象、およびその景観ないし風景は時代や地域によって異なる。まさに、景観や風景は「近代との出会い」を写しとる鏡の役割を果たしていることになる。

しかし、この鏡となる景観と風景という概念には明らかな差違がある。景観が物象的かつ客観的な概念であるのに対して、風景は木岡もいうように「感覚的かつ象徴的次元」のものであり、精神作用が大きく係わっている概念である。ひるがえって、われわれが「近代との出会い」について語る時には、それはさまざまな主体にとっての近代を語っていることになる。そうだとすれば、風景を通してこそ、われわれはさまざまな「近代との出会い」について多くのことを語ることができると思う。そこで、主としてこの風景という切り口から「近代との出会い」に迫ってみようというのが、今回のシンポジウムの狙いである。もちろん、それは景観からのアプローチを拒否するものではない。むしろ、両概念の交流は歓迎するところであり、本報告集でも景観概念からのアプローチも試みられている。

シンポジウムでは、それぞれの視点から「近代との出会い」へのアプローチがなされた。

蜷川順子氏は、オランダの画家フェルメールの『デルフトの眺望』からヨーロッパ近代の風景表現における科学的平等性と主観的志向性を読み取り、その生成とイメージのもつ意味について近代以前に遡りながら検証した。

森貴史氏は、フォルスターの『世界周航記』における自然のイメージと認識から秩序ある自然に優位性を与える近代ヨーロッパの視線を浮かび上がらせた。

野間晴雄氏は、近代地理学の父といわれるフンボルトによる中南米風景の科学的な捉え方・表現・言説をそのフィールドワークの原点に立ち返って検証することを試みた。

北川勝彦氏は、アフリカの風景、植民者にとっては征服達成の象徴が刻まれたジンバブエの「マトポの丘」が、同時にアフリカン（狩猟採集民、農耕者）にとっては歴史・意味・思いがきざみ込まれた土地であるという風景の対比から近代の意味を考察した。

木岡伸夫氏は、西欧の知性オギュスタン・ベルクが日本という写し鏡を介して、そこでの風景表現をめぐる比較文化論を通して「脱中心化」を遂げながら、ついには自己省察から「再中心化」へと回帰、そしてさらなる転回を遂げることの意味について深い考察を加えた。

山野正彦氏はヨーロッパ近代と風景・景観に関するそれぞれの発表についての的確なコメントを付しながら奥行き深い考察を加えた。そして、ヨーロッパ近代を視覚の優位が顕著になった時代と位置づけ、そこにおける景観と風景の意味を論じた。そしてランドスケープ概念へと導き、それが①物質的、②経験的、③表象的という三つのアспектをもつ複合的な概念であることを指摘した。

以上のように、5人の発表者とコメンテータによって、風景から「近代との出会い」について多様なアプローチがなされた。そして、シンポジウムは、平日であるにもかかわらず、六十名ほどの参加者を得て、長時間にわたっての発表に熱心に耳を傾け活発な質疑応答がなされ、盛会裡に終えることができた。